震度6：長岡

丸山久一
MARUYAMA Kyuichi
フェロー会員
長岡技術科学大学副学長

土曜日の夕方，いつもより少し早目に研究室を出て，とうに刈り取りが終わった田の中の道をいつものようにハンドルをきっていた。快晴の空も薄暗くなり星がきらめき始めてきた。家まで30分の道のりを10分も走らないうちに，突然，大きな轍にはまったかのように車体が左右に揺れた。きれいな舗装道路なのに何んでと思った瞬間，遠くの電線から火花がとび，周囲の家々から灯が消えた。

地震だと理解するのに数秒かかった。からだに少し震えがきて，ハンドルを握る手が固くなった。とにかく早く家に帰らなくてはと気は逸るのだが，前の車は恐る恐るとしか走らない。そうだカーラジオがあったとスイッチを入れたところ，新潟県の中越地方を震源とする震度6強の地震が発生したとのこと。各地の震度を次々と読み上げていた。

車はそれほど混んではいないが，交差点の信号という信号は全て消えているうえ，どの車もゆっくりとしか走らない。2度目の揺れは，信濃川を渡る橋の上であった。この橋は，数年前に架け替えられていて崩壊の危険性は非常に少ないものの，万が一のことが頭をよぎり，渡り終えるまで気が気でなかった。その時，メールが入って，一言“生きている”。家内からだった。冗談もほどほどにと思いながらも，もうすぐ家に着くと返事を出した。

3度目の揺れは，上越新幹線の下をくぐる時だった。前の車は停止した。ここでアーチ橋が落ちてきたら潰されると思い，必死で前の車を避け走り抜けた。家に着いて車を止めた瞬間に4度目の揺れ。止まっているのに，車はローリング。近所の人は皆外に出ていて，あちこちで悲鳴があがる。家内は地面を這っている。

車を出て，家内を起こし，とにかく近くの公園に避難。30分の距離を1時間かけて戻ってきたが，周囲は薄暗闇で何がどうなっているか十分つかめない。公園には近所の人たちが集まっていて，携帯テレビに地震のニュースが流れていた。震源地は長岡市の隣，小千谷市であるとのこと。家内は，携帯メールで東京にいる娘と息子に無事を知らせている。何をするということもなく空を見上げると，月がやたらと白い。薄暗い公園のベンチには，数人が固まって話し込んでいるが，時々揺れがくるたびに悲鳴があがる。

時間とともに寒さが増してきて，家内は毛布がほしいと言う。ドアを開けると下駄箱がひっくり返っていて，足の踏み場がない。踏み込もうとしたら余震がきて，慌てて離れる。揺れの合間にさっと入り，手探りで2枚の毛布だけを取って，逃げ出すように玄関を出る。毛布を体に巻くと結構暖かかった。

写真-1　書類と本の海となった部屋

家内によると，地震が発生した瞬間はグランドピアノの下にもぐり，ピアノの脚にしがみつきながら大きな揺れに必死で耐えていると，目の前で食器棚が倒れ，中の食器が一気に飛び出し，音を立てて破損する。家全体がパキパキ音をたて，2階では本棚が，また洋タンスが倒れ，ガラスの割れる音がする。生きた心地がせず，とにかく，無我夢中で家を飛び出したとのこと。免震装置の車の中とは恐怖感が全く違うと責められた。

電気もなく，メチャクチャになった家に入るわけにもゆかず，家内と二人で避難所の体育館を目指して歩き始めた。結局，着の身着のままで2晩を過ごす。

25日（月）に大学に出てみると，電気はまだ復旧せず，情報の受け取りも発信もできない。大学の校舎を見回ったところ，建物には特に目立った被害はなかった。ただ，私の部屋は，写真のように書類と本の海となっていた。口の悪い同僚からは，書類の山が海になっただけであまり変わりがないんじゃないのとのコメント。書類ラックは引き出しが開き，中の書類は飛び出していたものの，書棚は壁にボルトで留められていて動かず，パソコンは収納していたキャスター付きのラックが免震装置となっていて無事だった。その後も震度5の大きな余震に悩まされながら，学生や教職員全員の無事を確認し，9日後の11月1日からは授業を再開した。